

弘大とグリコが共同研究講座開設 生活習慣病原因解明へ

岩木プロジェクトビッグデータ解析

弘前大学(福田眞作学長)と大阪市の大手食品メーカー・江崎グリコ(江崎悦朗代表取締役社長)は、共同研究講座「体内環境モデリング研究講座」を同大学院医学研究科内に開設した。同大が17年間追跡収集している「岩木健康増進プロジェク

ト」の健康ビッグデータをあらゆる項目から解析することで、体内環境の変化と生活習慣病の発症の関連性を明らかにすることが目的。同社は最終的に続けて食べると健康になる食品の開発、提供につなげたい考え。

(石田紅子)

健康になる食品開発も



廣田 和幸

同研究科附属健康未来イノベーションセンター内に4月1日付で設置。研究期間は2026年3月末までの3年間で、同社から派遣の研究員1人が常駐する。

開設式が5月15日に同大医学部基礎校舎で開かれ、同大の福田学長、廣田和美同大学院医学研究科長、中路重之特任教授ら7人、同社の長谷川順一常務執行役員、田辺創一基礎研究統括ら3人が出席した。同社はグリコゲンを入れた栄養菓子の販売などで知られ、人々の健康な毎日の実現を追求するという精神を原点に、菓子や飲料などの食品事業を世界展開している。通称・岩木プロジェクトが認知症や腸内細菌、体力といった一般的な健診では取得しない項目を含む約3000項目もの健康ビッグデータを収集、解析していることに着目。体内環境の状況を反映するデータと個人の生活、食習慣

務執行役員ら

のデータを解析することで体内環境の変化と生活習慣の健康状態に与える影響を突き止め、人々の健康づくりに貢献できる価値の創出を目指す。長谷川常務執行役員は「普通の健康診断では取得できないようなさまざまな健康データがあるのは世界中を見ても岩木プロジェクトだけでは、両者が持つ強みを結集し、より高度な研究成果を生み出すことができるものと確信している」と期待を込めた。中路特任教授は「ビッグデータには網羅的なデータが含まれている。それを解析しながら答えを出すことが中心テーマとなる。新しいモデルが見つかる新たな(サービスや食品の開発につながる)可能性が出てくる」と述べた。企業やメーカーが参画する同大の共同研究講座は4月1日現在で18講座となった。

開設式に出席した(左から)弘大の廣田医学研究科長、福田学長、同社の長谷川常務執行役員ら